

第6章 総括

第1節 平坦部Aの出土遺物について

1 追加報告の遺物

第1・2分冊成稿後、報告すべき遺物の遗漏が判明したため、ここに追加報告する。

(1) 平坦部A-4表採・出土遺物 (図3-1)

879～881は土師質土器である。879は薄手の小皿で、口径6.7cm、器高1.75cm、底径3.6cmを測る。口縁端部内外面には、概ね口縁の2分の1の範囲に煤、タール状物質の付着が大きく4箇所認められることから、灯明皿として複数回の使用が想定できる。外面下半には、0.3cm幅の細いヘラ状工具により回転ナデが施されている。880は879と同タイプの小皿であろう。881は皿もしくは杯の底部片で、復元底径6.0cmを測る。底部切り離しは879、880が回転糸切り、881は静止糸切りによる。

882は青花磁で、見込みが凹む連子タイプの碗と考えられる。外面には花枝風の文様が、内面見込みには2重界線がみえる。

883～892は鍛冶滓である。883は不整形の小型滓で、一部に発泡痕を残す。礫などの付着は目立たない。重量は11.8gである。884、885、888、891は発泡ガラス質滓である。いずれも表面に小さな気泡が多く、破面では顕著に認められる。部分的にオリーブ黒色の光沢をもつ。884はほとんどガラス分であり、気孔が多く軽い。885は下面是平滑だが、上面は凹凸に富む。888は気泡痕が多いが、着磁性を有する。891は塊状の大きなガラス質滓で、下面に1cm程度の礫を噛み込んでいる。重量は110.8gを量る。

886は舌状を呈する小型滓で、表面は丸みを帯び、裏面は一部空洞となる。裏面には発泡痕が残る。重量は16.1gである。887はT字状を呈しており、両面とも凹凸に富む。表面には木質を噛み込んだような跡がみえ、1cm程度の礫が付着する。体積に対し、重量32.7gと重い。着磁性を有する。889は板状を呈する滓であるが、厚みは一様ではない。表面の一部に微細な発泡痕が残る。下面是比較的平坦で、礫などの付着はない。重量32.7gを量り、着磁性がある。890は流動性の高い鉄滓で、所々に小礫を内包する。下面是平坦で、礫の付着は目立たない。側面は一部に平らな面をもつ。全体的に黒色を呈し、わずかに光沢をもつ。

892は椀形滓である。表面は滑らかでやや壅み、赤錆が付着する。下面是炉底鉄化状態を示す凹凸が見られ、3～5mm程度の礫が多く付着している。全体的に着磁性を有する。重量は173.1gを量る。

(2) 平坦部A出土遺物 (図3-2)

893はI区本坊地区より出土した、船徳利形の朝鮮陶磁瓶である。内面には青海波状の叩き目痕が看取され、器壁は2～4mmと非常に薄い。胎土はにぶい赤褐色を呈した精緻な粘質土で、内外面に薄く釉が掛かる。外面は浅黄色～オリーブ黄色、内面は灰白色～オリーブ黒色が斑状に混じり発色している。外面肩部～胴部付近に、露胎となる指の跡が観察されることから、施釉は瓶全体を釉薬に浸すいわゆる「ズブ掛け」がなされたと考えられる。朝鮮陶磁瓶は、過去の調査時に平坦部Aのほか、直下の平場である平坦部Bでも数点採集・出土している。元々は平坦部Aに伴っていた可能性が高く、

同器種が2～3個体存在していたようである。なお、現状当遺跡では朝鮮陶磁の碗・皿類は出土していない。894は青磁無文外反碗で、復元口径14.2cmを測る。硬質だがやや精緻さに欠く灰色胎土に、ガラス質の明オリーブ灰色の釉が掛かる。釉が薄いため、外面のロクロ目が目立つ。III区庭園地区より出土した。

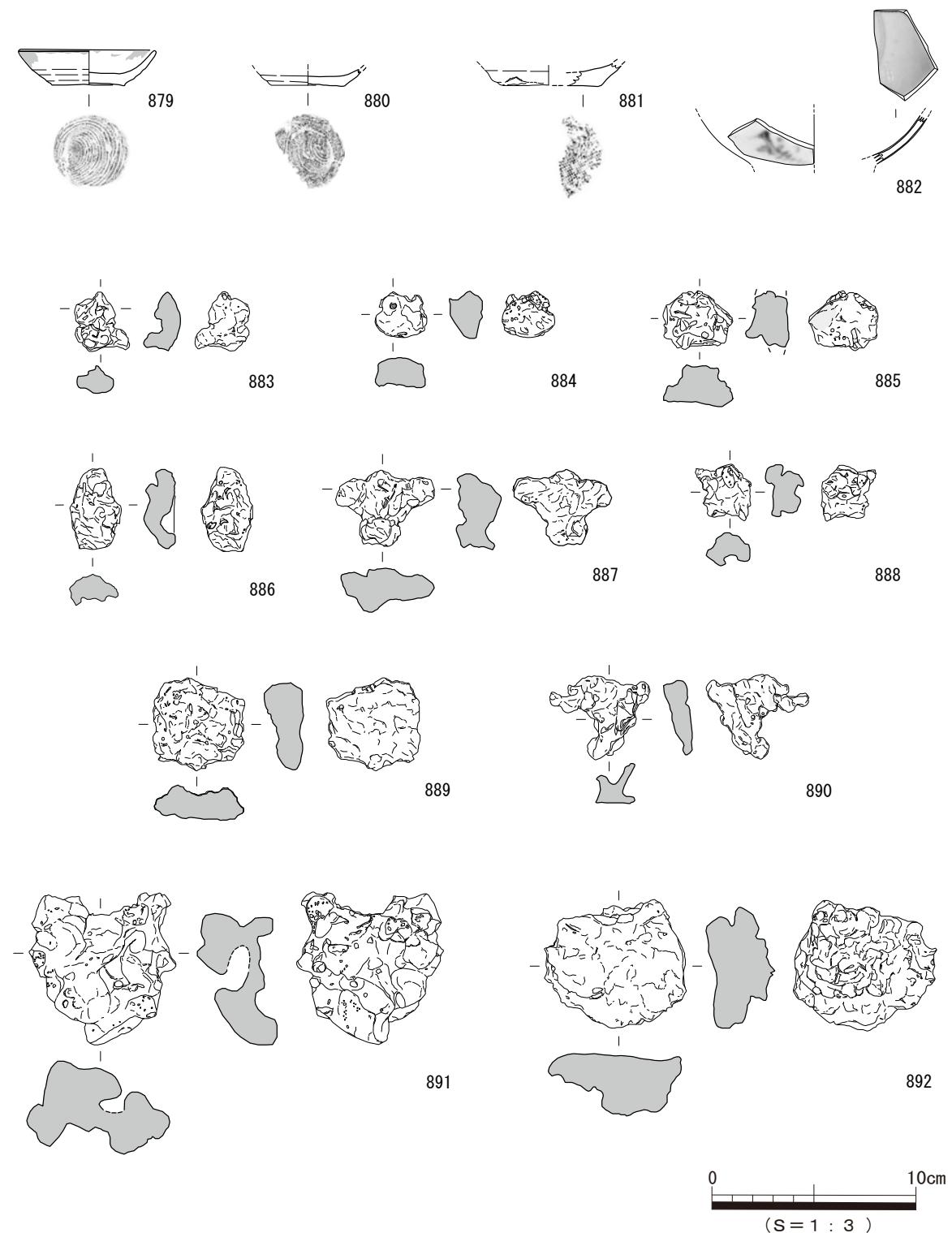


図3-1 平坦部A-4表採・出土遺物（追加報告）

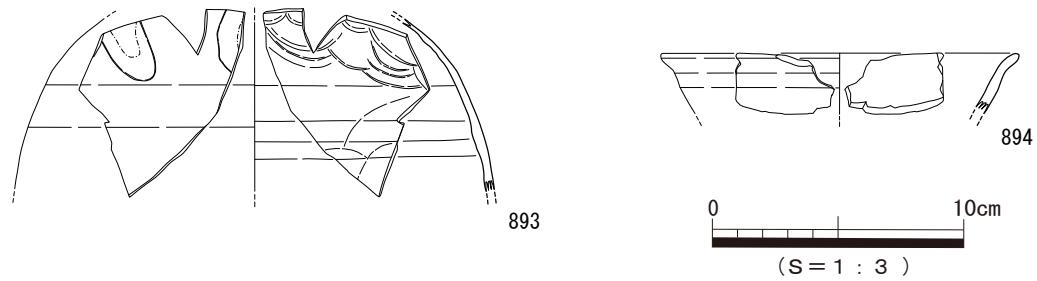


図3-2 平坦部A表採・出土遺物（追加報告）

表3-1 平坦部A-4表採・出土遺物（追加報告）観察表

※ [+] は残存値、[] は復元値

遺物番号	器種種類	出土地点	法量(cm)			胎土	色調	焼成	分類・備考	挿図番号	図版番号
			口径	底径	器高						
879	土師質土器皿	平坦部A-4 SP02 北側表層	6.7	3.6	1.75	◎ 1.5mm以下の赤褐色粒を多く、1mm以下の白色粒、0.5mm以下の角閃石、雲母をまばらに含む。	外：橙色(5YR7/6) 内：にぶい橙色(5YR6/4)	良好	回転糸切 口縁端部に煤 小皿	3-1	3-1
880	土師質土器皿	平坦部A-4 SP02 北側表層	—	[3.6]	[+0.8]	◎ 1mm以下の白・灰色粒、角閃石をわずかに、2mm以下の褐色粒を多く、0.5mm以下の雲母をわずかに含む。	外：橙色(5YR7/6) 内：橙色(5YR6/6)	良好	回転糸切 小皿 879と同タイプか	3-1	3-1
881	土師質土器皿か杯	平坦部A-4 トレンチ4表層	—	[6.0]	[+1.1]	◎ 2mm以下の白色粒、0.5mm以下の角閃石をわずかに、1mm以下の赤褐・黒色粒をまばらに含む。	外：橙色(5YR7/6) 内：橙色(5YR7/6)	良好	静止糸切	3-1	3-1
882	青花磁碗	平坦部A-4 SP02 検出面	—	—	[+2.4]	◎ 磁器	外：明緑灰色(5G7/1) 内：明緑灰色(5G7/1) 胎土：灰白色(2.5Y8/1)	堅緻	碗C群	3-1	3-1

遺物番号	種類	出土地点	寸法(cm)			重量(g)	備考	挿図番号	図版番号
			長さ	最大幅	最大厚				
883	鉄滓	平坦部A-4 北側表採	2.9	2.6	1.6	11.8	磁性有	3-1	3-2
884	鉄滓	平坦部A-4 北側表採	2.1	2.5	1.8	5.2		3-1	3-2
885	鉄滓	平坦部A-4 北側表採	2.8	3.4	2.1	12.6		3-1	3-2
886	鉄滓	平坦部A-4 北側表採	4.1	2.5	1.5	16.1		3-1	3-2
887	鉄滓	平坦部A-4 北側表採	3.7	4.7	2.0	32.7	磁性有	3-1	3-2
888	鉄滓	平坦部A-4 トレンチ4表層	2.5	2.4	1.9	7.0	磁性有	3-1	3-2
889	鉄滓	平坦部A-4 北側表採	4.3	4.5	1.9	32.7	磁性有	3-1	3-2
890	鉄滓	平坦部A-4 トレンチ4表層	4.1	4.8	1.9	22.7	流動性	3-1	3-2
891	鉄滓	平坦部A-4 トレンチ4表層	6.4	7.0	4.4	110.8		3-1	3-2
892	鉄滓	平坦部A-4 岩盤スロープ上堆積土	6.3	6.7	3.0	173.1	磁性有	3-1	3-2

表3-2 平坦部A表採・出土遺物（追加報告）観察表

※ [+] は残存値、[] は復元値

遺物番号	器種種類	出土地点・注記	法量(cm)			胎土	色調	焼成	分類・備考	挿図番号	図版番号
			口径	底径	器高						
893	焼締陶器瓶	平坦部A-I区 本坊No.1 20160219	—	—	[+6.8]	◎ 精緻・粘質土	外釉：浅黄色(5Y7/3)～オリーブ黄色(5Y6/3) 内釉：灰白色(5Y7/2)、オリーブ黒色(7.5Y3/1) 胎土：にぶい赤褐色	堅緻	朝鮮陶磁	3-2	3-1
894	青磁碗	平坦部A-III区 階段状遺構南側平坦面	[14.2]	—	[+2.4]	◎ 磁器	外：明オリーブ灰色(5GY7/1) 内：明オリーブ灰色(5GY7/1)	堅緻	IV類新相	3-2	3-1

2 土器・陶磁器の組成と年代観

本報告書第1・2分冊及び前項にて報告しているように、平坦部Aからは当遺跡の興隆を窺わせる豊富な量と質の遺物が出土した。被火痕を残すものも散見され、天正16年（1588）の火災に起因すると考えられる。一方、これらの多くは遺構面覆土中からの出土であり、基盤整地層や造成土、遺構に伴うものは限られることから、同時性や層位的な上下関係により新旧関係を捉えられるものは少ない状況にある。

そこで、出土遺物から中世等妙寺の実態に迫る試みの第一歩として、中世土器・陶磁器の様相把握に主眼を置き、基礎的整理を行った。基礎資料として用いたのは、平坦部Aより得られたピックダウンを含む中世土器・陶磁器破片総数1,325点である（表3-3）。

なお、平坦部A直下に位置する平坦部Bでは過去の調査時に遺物が豊富に採集・出土、それらの中には平坦部Aと接合関係にあるものがみられるなど関連性が高いことが判明している。よって、平坦部Bについても参考までにデータを提示することとした。

（1）種類別組成（表3-3、図3-3）

遺物の種類は、多いものから土師質土器（約65%）、中国陶磁器（約17%）、備前焼（約13%）で占められており、いずれも中世遺跡で普遍的に出土する生活雑器類を主体とする（表3-3）。続く瓦質土器（約3%）は火鉢や風炉を主とし、瀬戸美濃、亀山焼などの国産製品、朝鮮陶磁器、東南アジア陶器などの海外製品は各1%未満と僅少である。特徴的なのは土師質土器に次ぐ中国陶磁器の豊富さで、その数は国産陶器の備前焼に勝る。これらの傾向は平坦部Bでも同様であった（図3-3）。

地区別に量比をみると、I区本坊地区が699点（約53%）と平坦部A全体の半数以上を占め、III区庭園地区が558点（約42%）、II区本堂地区は57点（約4%）と極めて少量であった。

次に、種類別構成比を地区ごとに確認すると、I区では土師質土器、中国陶磁器、備前焼に続き、瓦質土器、瀬戸美濃、朝鮮陶磁器など最も多くの種類が認められた。II区では先の上位3種に、わずかに瓦質土器、瀬戸美濃が加わる。一方のIII区は前二者とは異なる様相を呈しており、多量の土師質土器に次いで備前焼、中国陶磁器、瓦質土器となる。特に総数に占める土師質土器の比率は、I区が約52%であるのに対し、III区では85%と卓越しており、この数値は生活空間（I区）と信仰空間（III区）といった場の性格の違いを反映していると考えられる。無論、土師質土器の大半は皿・杯であり、III区では供養具として多用されたのではないかと推察する。また、土師質土器には香炉や灯明皿が一定数みられる点も寺院としての性格を示しているだろう。この点については後述する本節第5項でも触れる。

土器・陶磁器以外では、茶臼や砥石、碁石などの石製品、飾り金具、鉄釘、銭貨などの金属製品も出土している。

（2）機能別組成（表3-4～3-7）

次に機能別に集計すると表3-4～3-7のようになる。総数に占める比率は供膳具が約75%、貯蔵具が約18%、調理具が1%未満と平坦部A・Bともに共通する。供膳具は土師質土器杯・皿が圧倒的多数を占め、これに青磁・白磁・青花磁の碗・皿類、少量の中国・瀬戸美濃天目で構成される。貯蔵具、調理具の大半は備前焼が占有し、貯蔵具ではこれに褐釉壺や東南アジア産陶器壺、わずかに亀山焼が加わる。調理具は備前焼擂鉢以外に瓦質土器鉢が少量みられる。

表 3-3 平坦部A出土土器・陶磁器の種類別組成一覧

種類	器種	平 I 区	坦 II 区	部 III 区	A 破 片 地点不明	数 全体	%
土師質土器	皿・杯	361	23	479	1	864	65.20
	香炉	3				3	0.23
小計		364	23	479	1	867	65.43
瓦質土器	鉢		1			1	0.08
	火鉢	17	3	1		21	1.59
	風炉	11	1			12	0.90
	その他	1		1		2	0.15
小計		29	5	2	0	36	2.72
備前焼	壺	13	1	3		17	1.28
	甕	2		2		4	0.30
	壺・甕	81	9	47	5	142	10.72
	擂鉢	3	1		2	6	0.45
瀬戸・美濃	水屋甕	2	2	1		5	0.38
	天目茶碗	1				1	0.08
	その他	3	1			4	0.30
	小計	4	1	0	0	5	0.38
亀山焼	甕	2				2	0.15
小計		2	0	0	0	2	0.15
その他国産		2				2	0.15
小計		2	0	0	0	2	0.15
日本製品小計		502	42	534	8	1,086	81.96
青磁	碗	39	2	6		47	3.55
	皿・杯	17				17	1.28
	盤	2	1			3	0.23
	瓶	5	1	2		8	0.60
	香炉	2				2	0.15
	その他		1			1	0.08
小計		65	5	8	0	78	5.89
白磁	碗	1				1	0.08
	杯	5		3		8	0.60
	皿	17	5	5	1	28	2.11
小計		23	5	8	1	37	2.79
青花	碗	11	3	2		16	1.21
	皿	13	2	1	1	17	1.29
	瓶	1				1	0.07
小計		25	5	3	1	34	2.57
青白磁	梅瓶	3				3	0.22
	合子			1		1	0.08
小計		3	0	1	0	4	0.30
黒褐釉	天目茶碗	1		3		4	0.30
小計		1	0	3	0	4	0.30
褐釉	龍文壺	55				55	4.16
	壺	13		1	1	15	1.13
小計		68	0	1	1	70	5.29
中国陶磁器小計		185	15	24	3	227	17.14
朝鮮王朝	瓶	6				6	0.45
小計		6	0	0	0	6	0.45
その他外国産	壺	6				6	0.45
小計		6	0	0	0	6	0.45
海外製品小計		197	15	24	3	239	18.04
合計		699	57	558	11	1,325	100.00

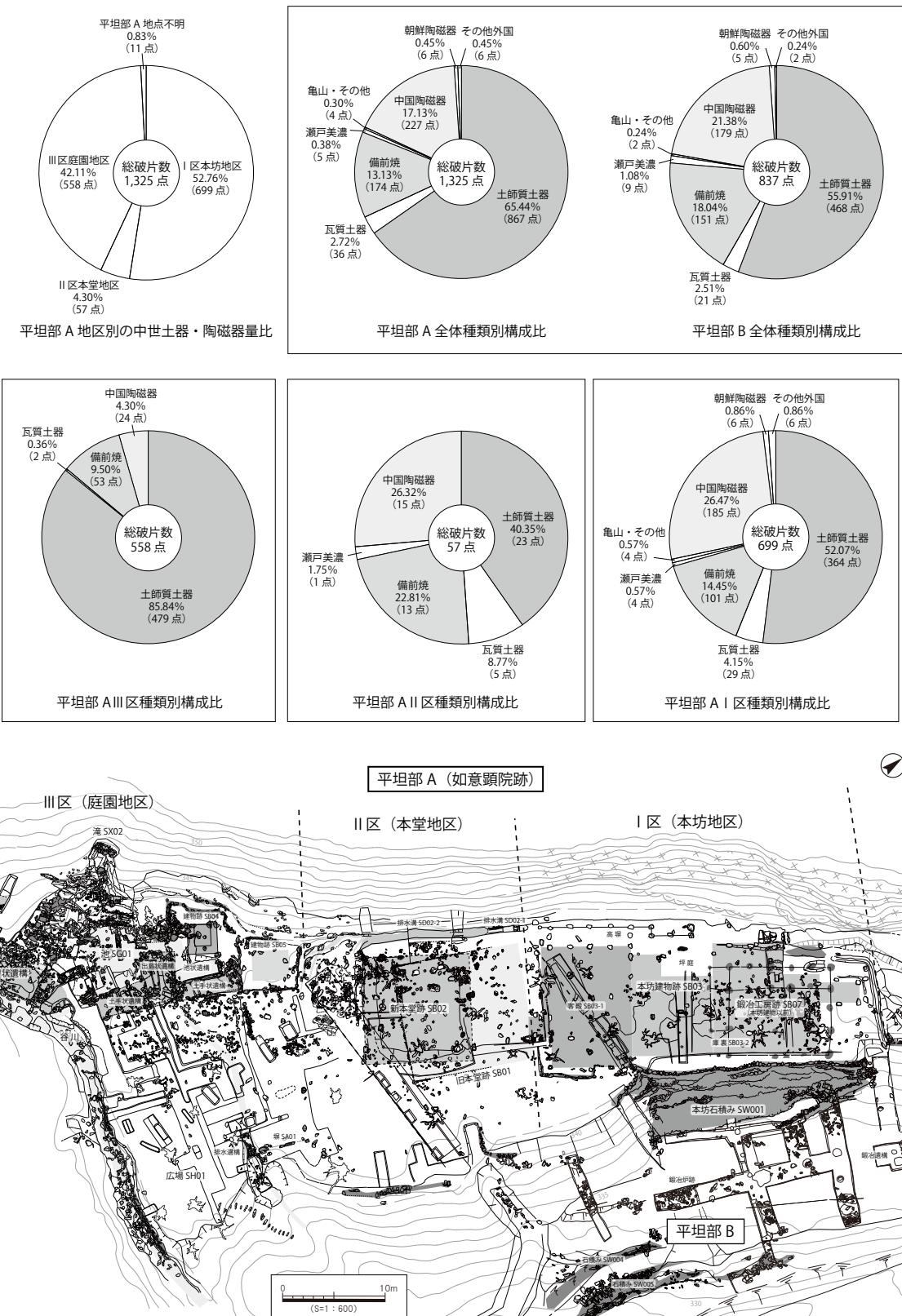


表 3-4 平坦部A出土破片数による機能別組成

機能・種類	%	破片数
供膳具	75.70	1,003
貯蔵具	18.57	246
調理具	0.60	8
煮炊具	0	0
その他・不明	5.13	68
計	100.00	1,325

表 3-5 平坦部B出土破片数による機能別組成

機能・種類	%	破片数
供膳具	75.39	631
貯蔵具	18.04	151
調理具	0.72	6
煮炊具	0	0
その他・不明	5.85	49
計	100.00	837

表 3-6 平坦部A出土破片数による機能別組成内訳

機能・種類	%	破片数
供膳具	土師質土器杯・皿	86.14
	瀬戸美濃天目	0.10
	青磁碗・杯・皿	6.38
	白磁碗・杯・皿	3.69
	青花磁碗・皿	3.29
	黒褐釉天目	0.40
計	100.00	1,003
貯蔵具	備前焼	68.29
	亀山焼	0.81
	瓦質土器	0
	褐釉壺	15
	龍文貼付褐釉壺	28.46
	その他外国産	55
計	100.00	246
調理具	備前焼	2.44
	瓦質土器	6
	計	25.00
計	100.00	8

表 3-7 平坦部B出土破片数による機能別組成内訳

機能・種類	%	破片数
供膳具	土師質土器杯・皿	73.69
	瀬戸美濃天目	1.27
	青磁碗・杯・皿	11.25
	白磁碗・杯・皿	8.08
	青花磁碗・皿	5.55
	黒褐釉天目	0.16
計	100.00	631
貯蔵具	備前焼	96.69
	亀山焼	0.66
	瓦質土器	0.66
	褐釉壺	0
	龍文貼付褐釉壺	1
	その他外国産	1.33
計	100.00	146
調理具	備前焼	0.66
	瓦質土器	0
	計	1.33
計	100.00	151

一方、鍋・釜などの煮炊具は両平坦部ともに出土していない（表 3-4、3-5）。現状では等妙寺旧境内全体でも湯沸かしとして使用されたと考えられる茶釜のみで、鍋が全く見当たらない。山寺での食習慣や調理方法を含めた煮炊形態に感興を覚えるが、管見では近隣の松野町に所在する河後森城跡でも同様に煮炊具が不足するほか、遺跡数、資料数に縛りがあるものの南予（伊予西南部）地域でも土製鍋の出土は少ない。推測の域を出ないが、土中に残りにくい鉄鍋使用の可能性を考えておきたい。

（3）年代観

遺構や整地層の年代決定をする際、本来であれば在地産土師質土器が重要な指標となるはずだが、当該周辺地域においては資料上の制約などから土師質土器編年が確立していない。まずは現状で把握し得る土器様相を示し、共通認識を得ることが先決と考え、平坦部A I 区・II 区の新出資料について

は第2分冊第5章にて一応の整理を試みた〔織田2021a〕。先行研究〔幡上2005〕を補強、変遷と年代的な見通しを示したが、今後も継続した検証作業を要し、未だ全幅の信頼を置くに堪えない。

そのため搬入品である国産陶器のうち大多数を占める備前焼、貿易陶磁器の中でも生産年代に近い時期に搬入され、消費サイクルの比較的早いと考えられる碗・皿類から実年代の推定を行った。結果、14世紀前半～16世紀後半にかけての遺物が確認され、文献から明らかな中世等妙寺の存続年代と符合することが確たるものとなった。勿論、時期による搬入量の多寡は存在しており、その点については本節第3・4項にて詳述する。

3 備前焼

(1) 種類 (図3-4)

平坦部A表採・出土の備前焼は、擂鉢や壺、甕、それに水屋甕と呼称されるものが認められる(図3-4)。出土破片数が突出するのは貯蔵具の壺・甕で、備前焼中では90%以上を占めている。破片数を比較する場合には、甕とその他の器種との法量差を考慮する必要はあるが、傾向の大枠を捉えることはできよう。

(2) 年代観 (表3-8、3-9、図3-4)

備前焼の分類・編年研究は古くから蓄積がなされているが、今回は重根弘和氏の一連の研究〔重根2003・2016等〕に基づき、破片数集計を行った。平坦部A表採・出土備前焼174点の基礎資料を対象としたが、口縁部片など時期年代を客観的に判断できる部位に限定すると、その数は大きく減ずることとなった(表3-8、3-9)。結果的にデータの乏しさは否めないが、むしろ当時の保有数に近い数値を示しているといえるだろう。以下、擂鉢と壺・甕に区分し特徴を述べる。

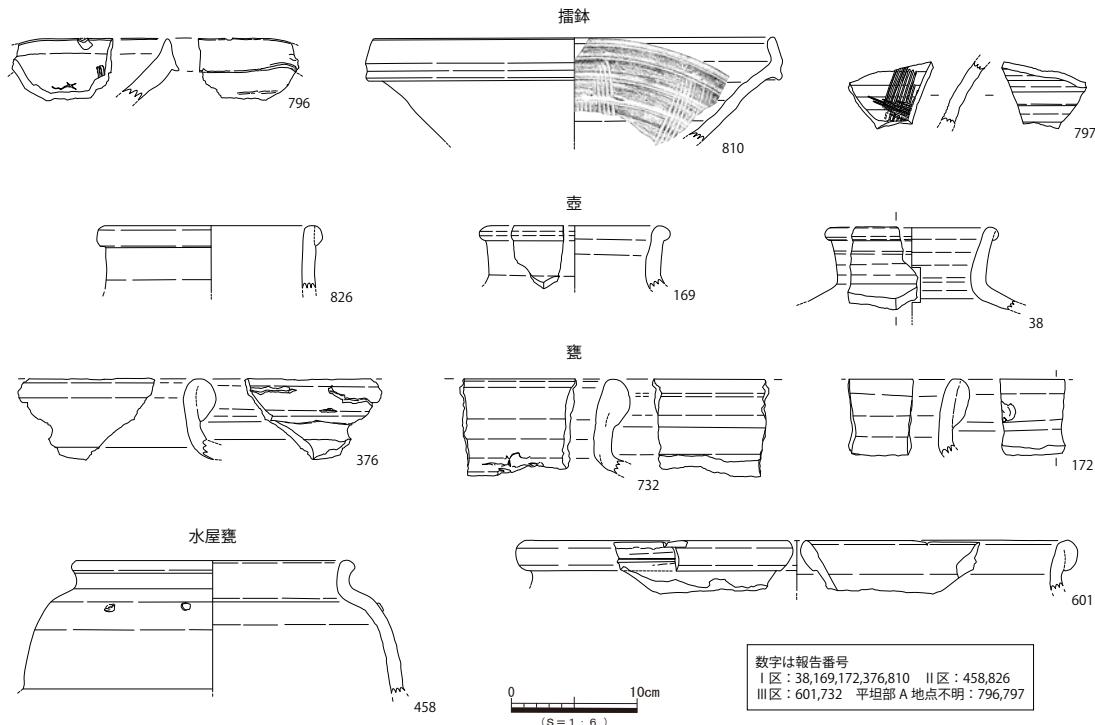


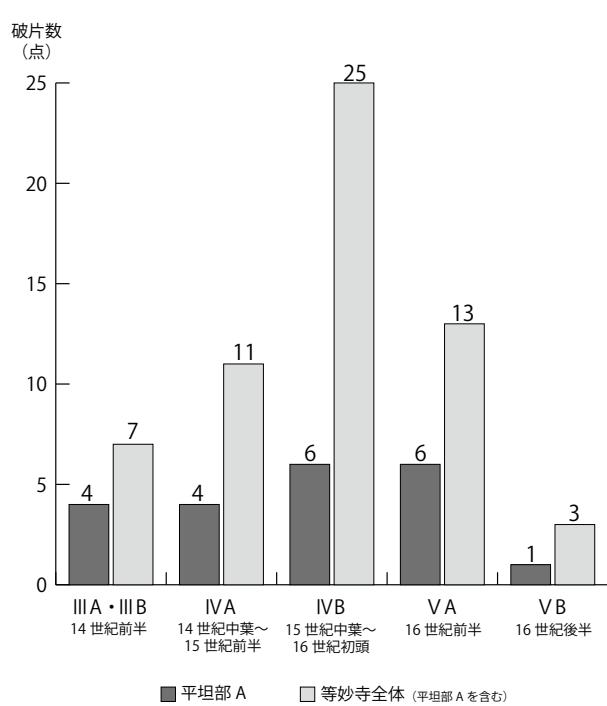
図3-4 平坦部A(如意顕院跡)出土 備前焼

表 3-8 時期別備前焼擂鉢出土状況

出土・採集地点	14世紀前半	14世紀前葉～14世紀中葉	14世紀中葉～15世紀前葉	15世紀前葉～15世紀後葉	15世紀中葉～16世紀初頭	15世紀後葉～16世紀初頭	16世紀前半	16世紀後半
	III A・III B	IVA-1	IVA-2	IVB-1	IVB-2	IVB-3	VA	VB
平坦部A I 区							1	
平坦部A II 区					1			
平坦部A地点不明				1				1
平坦部A 合計	0	0	0	1	1	0	1	1
等妙寺全体 合計 (平坦部A含む)	1	0	2	2	4	3	7	3

表 3-9 時期別備前焼壺・甕出土状況

出土・採集地点	14世紀前半			14世紀中葉～15世紀前葉			15世紀中葉～16世紀初頭			16世紀前半			16世紀後半				
	III A・III B			IVA			IVB			VA			VB				
	壺	甕	計	壺	甕	計	壺	甕	計	壺	甕	その他	計	壺	甕	その他	計
平坦部A I 区			0	2	1	3	2	1	3				2	2			0
平坦部A II 区	1		1			0			0				2	2			0
平坦部A III 区	2	1	3		1	1		1	1				1	1			0
平坦部A 合計	3	1	4	2	2	4	2	2	4	0	0	5	5	0	0	0	0
等妙寺全体 合計 (平坦部A含む)	5	1	6	7	2	9	5	11	16	0	1	5	6	0	0	0	0



擂鉢は口縁部内側に稜をもち、端部が上方へ拡張されるタイプ（図3-4（以下省略）：796）から交差擦り目をもつタイプ（797）まで確認される（表3-8）。重根IVB-1～VBに該当し、概ね15世紀～16世紀後半（末）に位置づけられる。

一方の壺・甕は、断面円形の玉縁口縁を有する壺（826）から長楕円形の玉縁口縁をもつ甕（172）がみられ、重根III A・B～IV Bに相当する（表3-9）。実年代では14世紀前半～15世紀後半頃に比定される。なお、表3-9のその他には水屋甕を含んでおり、すべて短く立ち上がる頸部から外方にわずかに折れた口縁部をもち、肩部に擂座、胴部に突帯を廻らせるタイプ（458）である。概ね16世紀前半の年代が与えられ、16世紀中葉以降に位置づけられる口縁部及び頸部が萎縮したタイプはみられない。

以上を整理すると、擂鉢は15世紀～16世紀後半、水屋甕を含む壺・甕は14世紀前半～16世紀前半の製品がみられる。擂鉢は新しいタイプ（16世紀後半頃）の搬入も確認されるが、壺・甕は15世紀後半に比定されるタイプが下限となり、16世紀前半に至っては水屋甕に限定される。こうした傾向は等妙寺全体の備前焼を含めても認められ、擂鉢と壺・甕の消費サイクルの違いを示すものと考えられる。つまり、擂鉢は日常的に使用する調理具であったことから消耗が早く、新しい製品へと入れ替わっていった一方で、壺・甕は貯蔵用の容器であり、耐久性もあることから長期に渡って使用された結果ではなかろうか。

（3）時期別の出土状況（図3-5）

最後に、備前焼全体の搬入量が時期ごとにどのように変化しているかを概観しておく（図3-5）。古い時期からみていくと、平坦部Aでは14世紀前半（ⅢA・B）～15世紀前半（ⅣA）にかけて一定量みられ、15世紀後半頃（ⅣB）にわずかに増加、16世紀前半（ⅤA）まで維持されるが、16世紀後半（ⅤB）に減少する。参考までに平坦部Aを含めた等妙寺全体の状況をみてみると、14世紀後半～15世紀前半（ⅣA）にかけて増加、15世紀後半にはさらに急増しピークを迎える。その後、16世紀前半には半減しながらも一定量の搬入は維持されるが、16世紀後半になると急激に減少する傾向が確認された。

4 貿易陶磁器

（1）種類（図3-6～3-8）

平坦部A出土の貿易陶磁器破片数は237点で、中世土器・陶磁器破片総数に占める割合は約18%である。産地の内訳は中国産227点（約95%）と突出し、朝鮮半島産6点（約2.5%）、その他東南アジア産の可能性のある破片が6点出土している（図3-6）。中国陶磁器の内訳をみると、青磁78点（約34%）、白磁37点（約16%）、青花磁34点（約15%）と青磁が多く、白磁、青花磁はほぼ均等という結果が得られた（図3-7）。平坦部Bでは白磁がやや多くなるが、同様の傾向といえるだろう。また、平坦部Aでは褐釉陶器70点（約30%）と際立つが、その内訳は龍文貼付褐釉壺55点、その他の褐釉壺15点である。

器種でみると大半が普及品である碗・皿類で占められ、出土量が少なく付加的価値が推定できるものを奢侈品とすれば、青白磁梅瓶、青磁盤・香炉・瓶などが挙げられる（図3-8）。青花磁瓶も1点出土しているが、奢侈品の多くは青磁に占められる。さらに朝鮮王朝瓶や青磁菩薩像、日本国内では類例の限られる龍文貼付褐釉壺も出土している。

（2）年代観（表3-10、3-11、図3-9、3-10）

貿易陶磁器の分類・編年研究は近年活況を呈していることから、これらの成果を加味して設定した分類、時期区分に基づき、破片数集計を行った（表3-11）。対象は平坦部Aのほか、平坦部B、そして過去調査で得られた等妙寺全体の中国陶磁器碗・皿類である。分析で用いた分類や時期区分、年代は表3-10のとおりで、詳細については各文献を参照いただきたい。なお、集計にあたっては接合後の破片を1点とするが、小片のため分類を判断しかねるものについては、より可能性のある2分類それぞれでカウントしている。

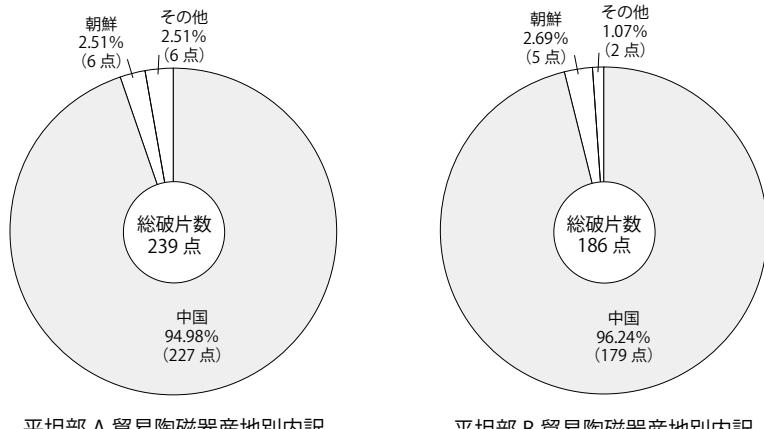


図3-6 貿易陶磁器产地別内訳

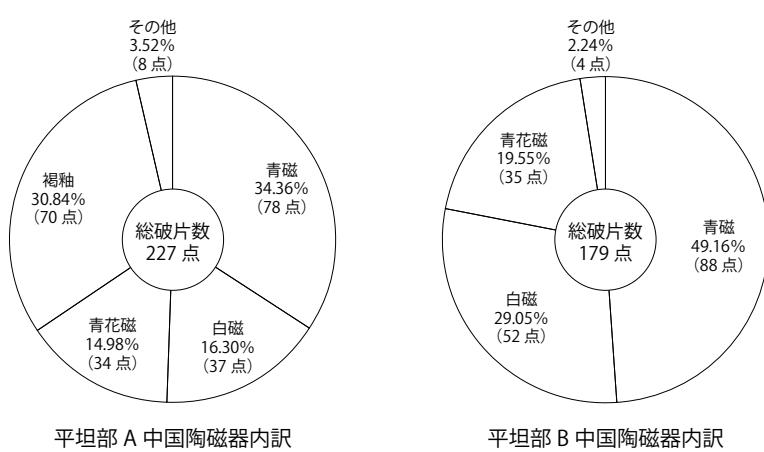


図3-7 中国陶磁器の内訳

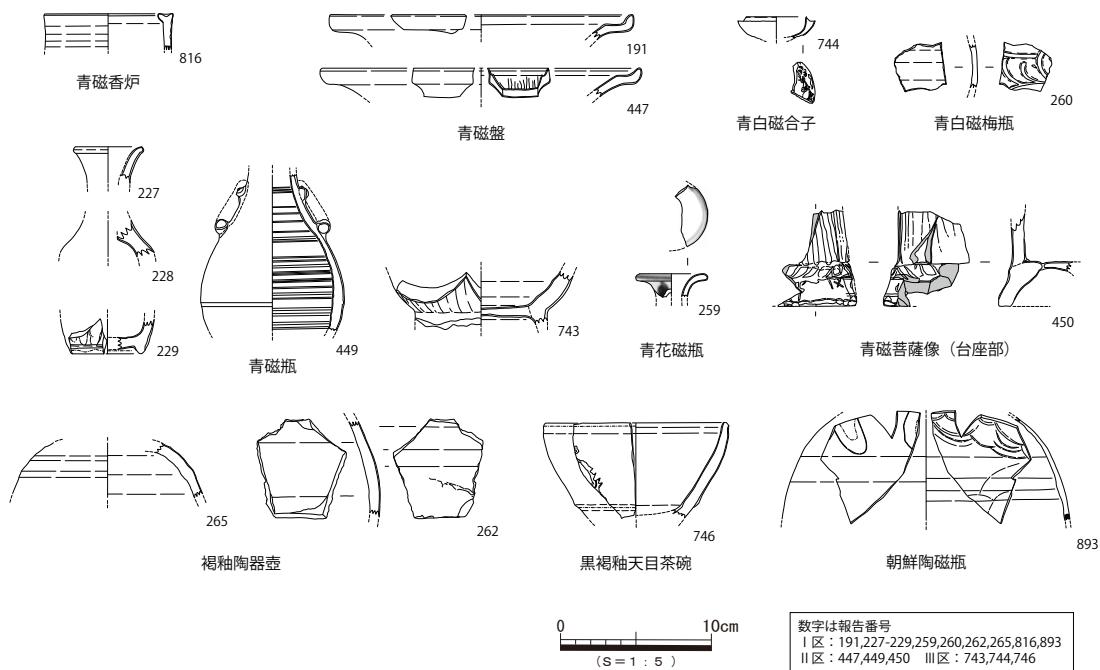


図3-8 平坦部 A (如意顕院跡) 出土 その他の貿易陶磁器

表3-10 分析で使用した時期区分と年代、主な分類

時期区分	年 代	指標とする主な分類
A期	13世紀前半	青磁II類 (太宰府市教育委員会編 2000)
B期	13世紀後半～14世紀前半	青磁III類、白磁IX類 (太宰府市教育委員会編 2000)、白磁B群 (森田 1982)、青磁IV類古相 (瀬戸 2015 ほか)
C期	14世紀後半～15世紀初頭	青磁IV類新相・IV'類・V類古相 (瀬戸 2015 ほか)、白磁ビロースクタイプIII類 (金武 2009)
D期	15世紀前半～後半	青磁V類新相・V類末相 (瀬戸 2015 ほか)、白磁D群 (森田 1982)、青花磁碗B群 (小野 1982 ほか)
E期	15世紀末～16世紀前半	青磁VI類古相・VI類新相 (瀬戸 2015 ほか)、白磁E1群 (森田 1982 : E群のうち菊皿を除く)、青花磁碗C群・D群、青花磁皿B1群・C群 (小野 1982)
F期	16世紀中葉～後半	青磁VII類 (瀬戸 2015 ほか)、青磁景德鎮皿 (柴田 2001)、白磁E2群 (森田 1982 : E群のうち菊皿)、青花磁碗E群、青花磁皿B2群 (小野 1982)・E1群・E2群 (柴田 2001)、漳州窯等粗製

表3-11 時期別貿易陶磁器出土状況

出土・採集地点	A		B				C			D			E					小計					
	13世紀前半	小計	13世紀後半～14世紀前半				小計	14世紀後半～15世紀初頭			小計	15世紀前半～後半			小計	15世紀末～16世紀前半							
			青磁II	青磁III	白磁IX	白磁B		青磁IV古	青磁IV・V新・V'新	白磁ビロースクIII		青磁V古	青磁VI古・新	白磁D	青花磁碗C群	青花磁碗D群	青花磁皿B1群	青花磁皿C群					
平坦部A I 区	0	4					4	1			1	2	29	6	1	36	25	14	3	9	1	52	
平坦部A II 区	0						0				0		3		3	1	3	2		2		8	
平坦部A III 区	0						0	3			3	3	3		6	1	1	1		1		4	
平坦部A地点不明	0						0				0		1		1					1		1	
平坦部A 合計	0	4					4	4			1	5	32	13	1	46	27	18	6		13	1	65
平坦部B 合計	1	1	6		1		7	3	1	1	5	27	3		30	30	46	4		21		101	
等妙寺全体 合計 (平坦部A・B除く)	0						0	9			1	10	19	2		21	9	25	11		34	1	80

出土・採集地点	F								合計	
	16世紀中葉～後半									
	青磁VII	青磁景德鎮皿	白磁E2	青花磁				小計		
平坦部A I 区	1			1				6	8	102
平坦部A II 区								0		11
平坦部A III 区								0		13
平坦部A地点不明								0		2
平坦部A 合計	1			1				6	8	128
平坦部B 合計	2	1					1	4	8	152
等妙寺全体 合計 (平坦部A・B除く)	1						4	10	15	126

生産年代に近い時期に当遺跡にもたらされたという前提の上だが、平坦部BではA期（13世紀前半）に位置づけられる鎧蓮弁の青磁II類碗が1点確認されたものの、平坦部Aでは14世紀前半～16世紀後半で收まり、文献に記された中世等妙寺の存続年代とほぼ一致する（図3-9、3-10）。B期（13世紀後半～14世紀前半）には高台接地部の釉を削り取った青磁III類杯もしくは皿（図3-9（以下省略）：

193）がわずかに認められるのみで、白磁や青磁IV類古相は出土していない。平坦部Bでは白磁B群の可能性のある破片が1点確認されるものの、遺物相は貧弱である。続くC期（14世紀後半～15世紀初頭）では青磁IV類新相、IV'類、V類古相がわずかに確認できる一方、白磁ビロースクタイプIII類は可能性のある破片が平坦部Bで1点みられるのみである。D期（15世紀前半～後半）になると搬入量は増加、青磁V類新・末相が卓越する。白磁D群は外面下半露胎のタイプ（799）や、全面施釉で高台を抉るタイプ（9）があり時期差が看取される。15世紀中葉以降に位置づけられる外反器形の青花磁碗も1点出土している（246）。続くE期（15世紀末～16世紀前半）で搬入量はピークを迎える、青磁VI類、白磁E1群、青花磁皿B1群が盛行し、青花磁碗・皿C群もみられる。F期（16世紀中葉～後半）はE期に比して急激に減少し、搬入の衰退期といえる。青磁VII類、青花磁碗E群、漳州窯製品が散見されるのみで、16世紀中葉的様相とされる青磁景德鎮皿、菊皿などの白磁E2群、青花磁皿B2群、皿E1群などはみられなかった。

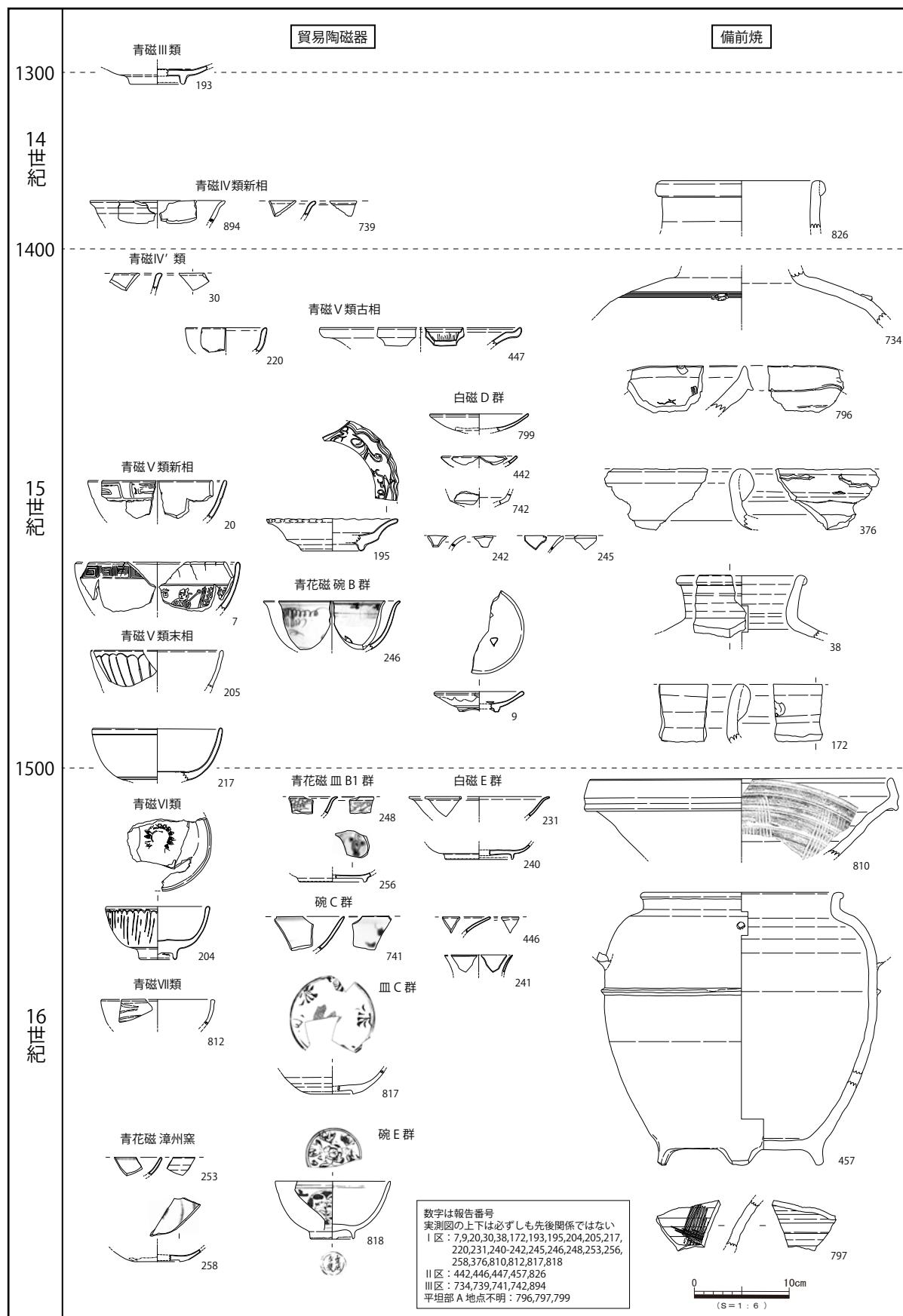


図3-9 平坦部A（如意顕院跡）出土遺物の変遷（貿易陶磁器・備前焼）

以上のように中国陶磁器碗・皿類の年代では、13世紀代に位置づけられるものもわずかに含むが、ほぼ14世紀前半～16世紀後半のもので占められる。

14世紀前半～15世紀初頭までは搬入量は僅少だが、15世紀代に増加、15世紀末～16世紀前半にかけて搬入の最盛期となる。その後、16世紀中葉以降は急激に減少する。

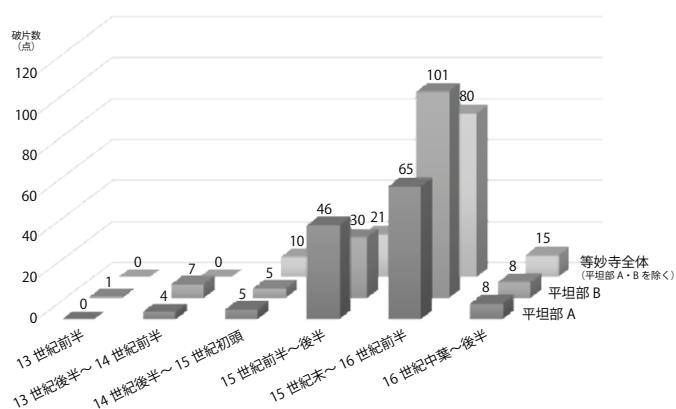


図3-10 貿易陶磁器搬入量の推移

(3) 特筆すべき貿易陶磁器

①龍文貼付褐釉壺 (図3-11、写真3-1～3-3)

等妙寺旧境内を特徴づける貿易陶磁器として龍文貼付褐釉壺を紹介しておきたい(図3-11)。褐釉龍文壺やドラゴン・ジャーとも呼称されるように、龍文を立体的に貼り付けたもので、龍の体部が縦耳となる。本例は六耳壺とみられ、半裁竹管を用いて龍の鱗を表現しており、細部の加飾にはヘラや櫛状工具の使用が観察される(写真3-1～3-3)。1個体分とみられる接合後破片数55点が平坦部A I区表層を中心に出土していることから、本坊建物跡S B 0 3に伴うと考えられる。なお、過去の調査では直下の平坦部Bからも表採されているが、平坦部A資料と接合関係にあるものが多い。

破片からの復元値となるが、口径15.6cm(最大口径16.8cm)、器高44.2cm、胴部最大径33.8cm、底径15.8cmを測る(図3-11)。やや短い頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は外方に折り曲げている。口縁端部は面を成し、下端はナデにより尖り気味におさめる。丸みを帯びて張る肩部から、胴部上位で最大径となり、底部へ緩やかにいたる。底部はわずかに上げ底である。胴部中位の器壁は薄い。口縁部外面以下に灰オリーブ～茶褐色を基調とする釉が掛かるが、外面胴部下半は露胎となる。内面の釉は大胆に刷毛塗りされるが薄く、内面胴部下半はロクロ目が目立つ。素地は灰色を呈し、白・黒色微粒をまばらに含有するが緻密である。白色礫も少量観察される。破片であることを除けば比較的良好な状態であるが、被熱あるいは摩滅により外面の釉が部分的に剥離したものもわずかに認められる。

②龍文貼付褐釉壺の類例 (図3-12)

管見では西日本の類例は10例を数え(図3-12)、東日本では新府城跡(山梨県韮崎市)、沈没船では1600年にフィリピンマニラ沖で沈没したサン・ディエゴ号、中国広東省沖で見つかった明萬曆とされる南澳I号出水例がある。ほかに文様の意匠が異なるが、京都真如堂伝世品が知られる。西日本の類例は物資が集散する港湾部や流通拠点、城館や寺院、権力の中枢地付近での出土が目立つ。年代では相国寺旧境内出土例が最も古く、15世紀代に遡る。沖縄分類1類〔瀬戸ほか2007〕に比定され、共伴遺物の年代観から応仁・文明の乱以前と考えられている〔永野2017〕。京都真如堂伝世品も室町幕府8代将軍足利義政(在職:1449-1473年)寄進と伝わり、これらは足利氏関連の日明貿易によりもたらされた可能性が高い。16世紀代を中心とするものは等妙寺旧境内、中世大友府内町跡、池之上城跡出土例などが該当し、その荷担者は大友氏関連の南蛮船のほか、遣明船、私貿易船が想定されよう。なお、等妙寺旧境内例は出土状況からは15世紀末～16世紀後半と時期幅が存在し、16世紀

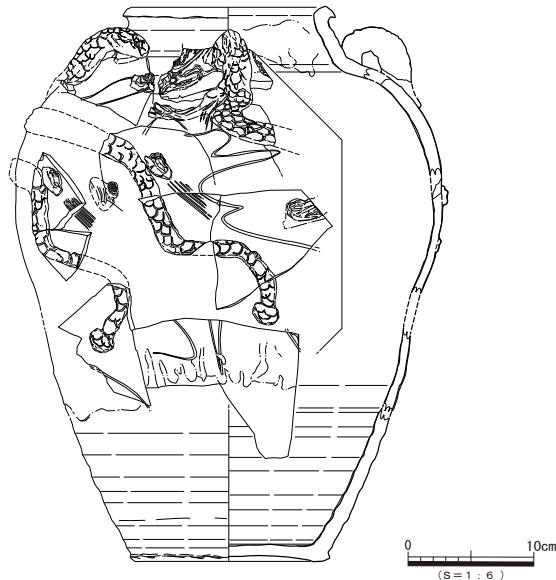


図 3-11 平坦部 A 出土の龍文貼付褐釉壺



写真 3-1 ヘラや櫛状工具による加飾



写真 3-2 龍の頭部



写真 3-3 鱗の表現

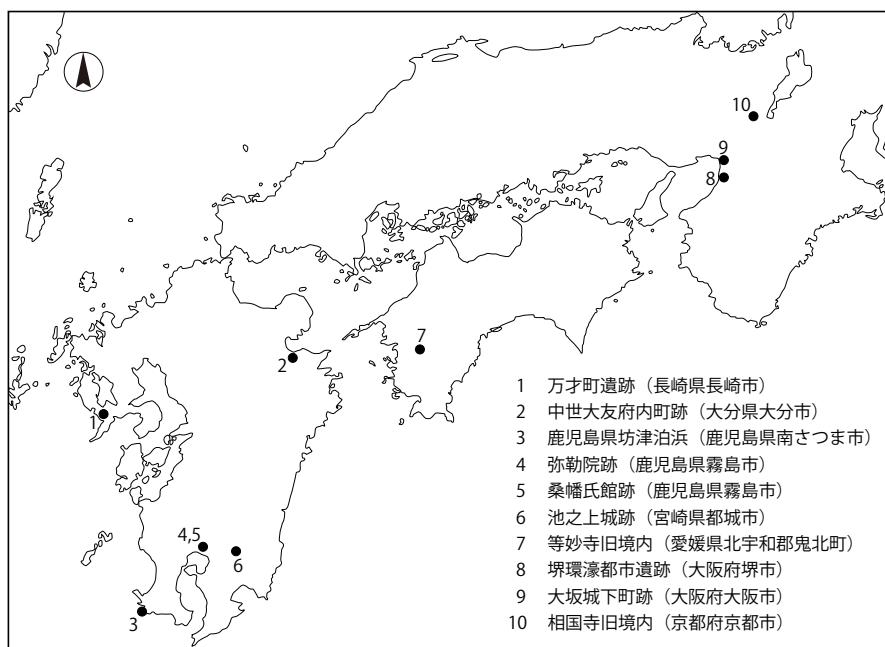


図 3-12 龍文貼付褐釉壺の主な出土地

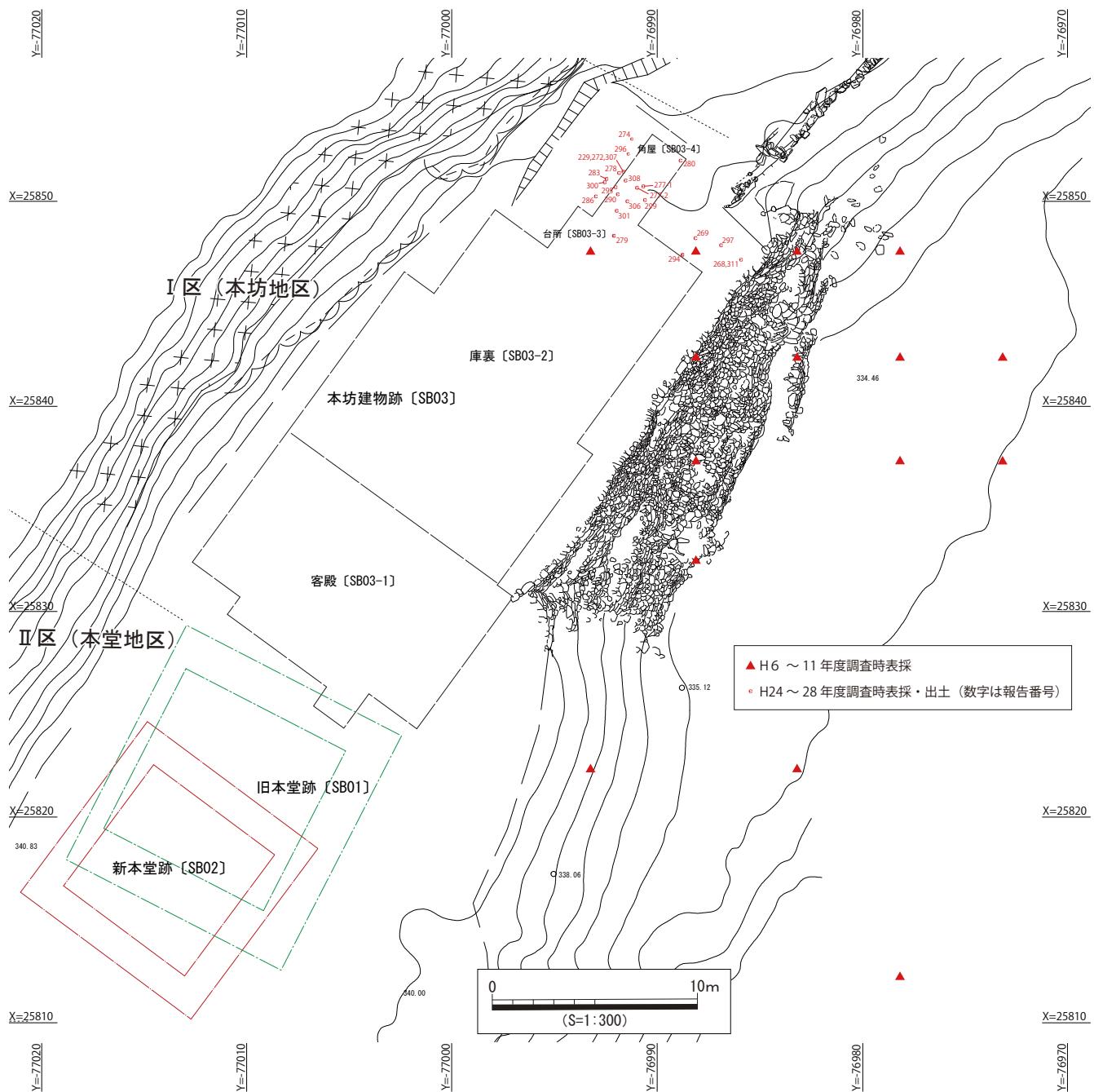


図 3-13 龍文貼付褐釉壺の出土・採取位置

のどの段階かは断定できないが、サン・ディエゴ号、南澳 I 号出水例と酷似している。続く 17 世紀初頭では万才町遺跡、堺環濠都市遺跡、大坂城下町跡例が挙げられ、入手ルートとしては前者が南蛮貿易、後二者が朱印船貿易と考えられる。

龍文貼付褐釉壺の産地は中国福建窯系との指摘があり [大分県教育庁埋蔵文化財センター編 2013]、東南アジア方面で数多く見つかっている。よって、東南アジア向けの製品であると推測でき、限定的な出土を示す日本では特注品であるとの見方もできよう。いずれにしても現状では個々の類例について詳細に述べる用意はないので、機会を改めて報告することとしたい。

③龍文貼付褐釉壺の出土状況から（図3-13）

平坦部Aでの出土状況や国内の類例に照らせば、当遺跡には製作年代からさほど遡ることなくもたらされたと推測され、その時点で骨董品的価値を有していたとは考えにくい。一方で、先に見た希少性から言えば、大型の青磁類のような仏堂を莊厳する唐物、あるいは居室の室礼としての用法を想定できないだろうか。

ところが、遺物の表採・出土分布状況を詳らかにすると、破片は散逸しながらもI区本坊建物庫裏の北端部、特に倉庫的機能をもつ角屋が復元されるエリアに高い密度で分布していることが判明した（図3-13）。実資料に内容物を推し測る痕跡は残されていないが、例えば葉茶壺のように貯蔵容器としての使用、すなわち「実用奢侈品」としての在り方を考慮すべきかもしれない。

龍文貼付褐釉壺の用法は即座に判断しかねるが、当遺跡を象徴する遺物の一つであり、天正16年（1588）の火災時点では日常生活空間である本坊建物庫裏、とりわけ角屋が想定されるエリアに置かれていた可能性が高いことを指摘しておきたい。

（4）貿易陶磁器からみた等妙寺旧境内（図3-14）

先に平坦部A貿易陶磁器の時期別出土状況を確認したが、これに過去の試掘調査資料を加え、現状で把握し得る等妙寺全体の傾向を示すと図3-14のようになる。平坦部Aと同様の傾向ながらも搬入量の多寡はより顕著となり、ここでいうC期（14世紀初頭～15世紀初頭）からD期（15世紀代）にかけて約4.8倍増加、D期からE期（16世紀前半）では約2.5倍増加でピークに達し、F期（16世紀中葉～後半）には約8分の1に減少する。発掘調査の所見からみても15世紀末～16世紀前半にかけて盛期があることは疑いないが、16世紀中葉以降最新型式の陶磁器がほとんど搬入されておらず、中世等妙寺は急激に衰退したのであろうか。実際にはそうともいえず、16世紀後半に位置付けられる備前焼や土師質土器は出土し、文献からも戦国期を通して伊予や土佐の近隣在地領主らの庇護を得て、寺勢を維持していたことが判明している（本章第2節にて詳述）。

このような状況から想起されるのは瀬戸内海流通との関係である。瀬戸内海交易の重要な拠点である芸予諸島（能島城・見近島）や瀬戸内海南岸地域の河野氏居城湯築城跡においても16世紀中葉を境に貿易陶磁器と備前焼の出土量が激減するという状況が認められ〔柴田2011a、田中編2019〕、これには豊後府内という新たな中継集散地の出現により、多元的であった瀬戸内海の貿易が一元化された結果との一説がある〔坪根2011〕。合わせて、中国・四国地方では16世紀に盛期を迎えるが、16世紀後半まで盛期が継続されない遺跡が多いとの指摘もあり〔柴田2011b〕、無関係ではなかろう。南予地域では発掘調査がなされた中世遺跡は少なく、そもそも資料数に大差があるため単純比較はできないが、表採資料をも対象に検討すると盛期は確かに16世紀前半である〔織田2020〕。少ないながらも16世紀中葉以降、一定量の搬入が継続されるのは松野町に所在する河後森城跡など少数に限られ、次第に地域の

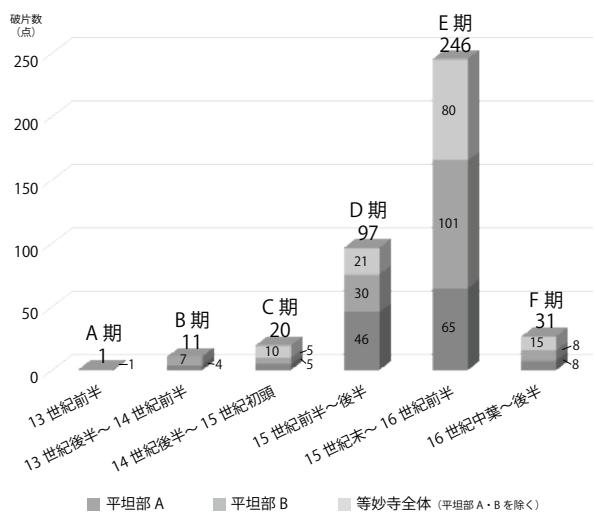


図3-14 貿易陶磁器搬入量の推移（等妙寺全体）

拠点的な城に収斂されていく様子が伺われる。これまで言及されていなかったが、広域・中域流通品の末端消費地である等妙寺旧境内、ひいては南予地域においても16世紀中葉を画期とする流通構造の変化の枠組みで捉えることができるだろう。周辺地域をも含めた更なる検証は今後の課題したい。

5 寺院関連遺物

平坦部A出土遺物の中で寺院らしさを示す遺物、すなわち宗教活動において使用されたであろう仏具を中心に抽出を試みた（図3-15）。

（1）仏具・信仰関連遺物（図3-15、写真3-4、3-5）

まず、堂内を加飾する莊嚴具は飾り金具（836、527）や幡頭金具（434）があり、僧侶が仏教教義を実践するにあたって不可欠な僧具は、数珠玉（819）がみられる。密教法具は、鉢の先端が欠損した小型の五鉢杵（530、写真3-4、3-5）が出土しているほか、平坦部Aで採取されたとされる金剛鉢（銅製鉢身）がある〔鬼北町（旧広見町）教委1999、鬼北町教委2020〕。

土製僧形像（426）や青磁菩薩像（450）は特殊品で、まさにここが信仰空間であったことの傍証となる。銅鏡（791）や鉄鎌（522）は奉納物との見方もあり、さすれば外部世界、地域へと開かれた靈場、寺院としての姿を垣間見ることができよう。

供養具は、香・華・燈を用いての基本供養に使用される仏具であるが、これに該当する金属製品は出土していない。もとより、出土しないこと＝所有していないとは言い切れないが、遺跡出土の仏具は金属製に限らないことは既知の事実である〔水澤2006、山川2006等〕。ここでは材質にこだわらず、供養具としての使用を想定し得る土器・陶磁器を挙げておく。

香供養具の典型は香炉で、青磁（816）や土師質土器（152）のものが出土している。瓦質土器火鉢と分類されるものでも小型浅鉢タイプ（453）は香供養具としての使用が可能と考えられる。花瓶などの華供養具は瀬戸美濃（187、451）や青磁（227～229、449）、青花磁（259）などが担ったと想定されるが、燭台のような燈供養具は見つかっていない。一方で、口縁部に煤やタール状物質が付着する土師質土器（46）は散見され、土器に火を灯した往時の夜間勤行や儀礼が想像に容易い。さらに、燻やミガキ調整が丁寧になされた瓦質土器碗（33）や、極めて堅緻に焼成された土師質土器杯（424）など、大多数を占める日常什器類とは異とするものがみられ、これらを供養具と考えた。

以上に挙げた土器・陶磁器はさまざまな機能・用途を内包していることから、供養具と断定する根拠の乏しさは否めない。機能・用途の多様性こそが中世土器・陶磁器の本質であろうが、金属製品以外の仏具の認知方法の確立、検証が今後の課題である。

（2）喫茶関連遺物（図3-15）

次に喫茶関連遺物を挙げておきたい。中国産や瀬戸美濃産の天目茶碗（746、185）、茶壺と考えられる褐釉陶器壺（265）、瓦質土器風炉（157、159、161）や茶臼（315）が出土している。平坦部Aで



写真3-4 530 詳細（上より）



写真3-5 530 詳細（側面観）

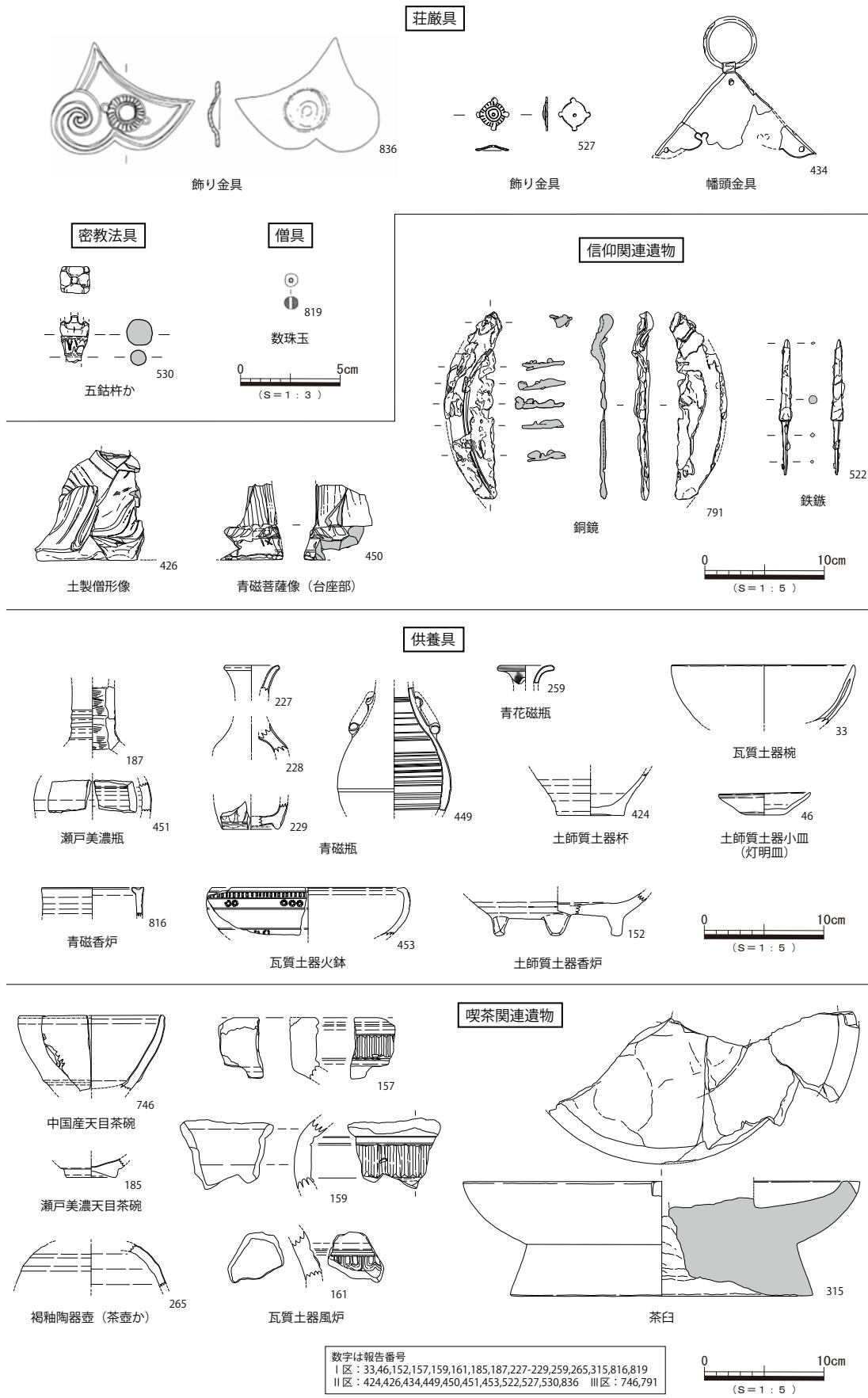


図3-15 平坦部A(如意顕院跡)出土 寺院関連遺物

は得られていないが茶入や水注、茶釜などがこれに加わる。言うまでもなく、喫茶関連遺物は領主館などでも頻繁に出土するが、寺院社会の献盃儀礼では武家のそれとは異なり、茶事を儀礼の一環として取り入れていたことが明らかにされている〔中井 2011〕。寺院では喫茶の頻度が高いことを鑑みれば寺院らしさを示す遺物といえる。

6 その他の遺物

(1) 銭貨 (図 3-16、表 3-12)

平坦部Aより表採・出土した銭貨は、寛永通寶や近代銭を除くと76枚である(表 3-12)。銭種の判明した銭貨のうち、初鑄年が最も古いものは開元通寶(621年)で、最新銭貨は1408年の永楽通寶であった。鑄造王朝別の構成を見てみると、北宋銭が全体の73.7%と大部分を占め、次いで唐銭の開元通寶(隸書)、洪武通寶(1368年初鑄)や永楽通寶の明銭が6.6%となる(図 3-16)。そのほか南唐銭の開元通寶(篆書・960年初鑄)と南宋銭の慶元通寶(1195年初鑄)が各

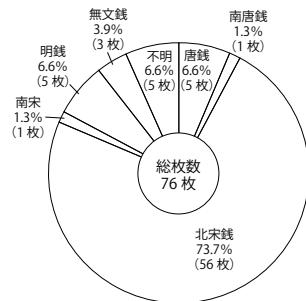


図 3-16 平坦部A出土中国銭の銭種構成

表 3-12 平坦部A出土銭貨一覧 (寛永通寶、近代銭を除く)

銭名	初鑄年 (中国王朝)	出土枚数						
		I区 SP06	I区 表採・出土	I・II区間 表採・出土	II区 地鎮遭構	II区 表採・出土	III区 表採・出土	計
開元通寶	621年(唐)		2		3			5
開元通寶	960年(南唐)					1		1
太平通寶	976年(北宋)				1			1
淳化元寶	990年(北宋)		1					1
至道元寶	995年(北宋)					1		1
景德元寶	1004年(北宋)		1		1			2
祥符元寶	1008年(北宋)				1	2		3
祥符通寶	1008年(北宋)				1	1		2
天禧通寶	1017年(北宋)				3			3
天聖元寶	1023年(北宋)		1					1
皇宋通寶	1038年(北宋)		2	1	4			7
嘉祐通寶	1056年(北宋)		2		2	1		5
治平元寶	1064年(北宋)		1		1	1		3
熙寧元寶	1068年(北宋)	1			3		1	5
元豐通寶	1078年(北宋)	1			5	2		8
元祐通寶	1086年(北宋)		3		4			7
紹聖元寶	1094年(北宋)				1			1
聖宋元寶	1101年(北宋)		1		3			4
大觀通寶	1107年(北宋)					2		2
慶元通寶	1195年(南宋)		1					1
洪武通寶	1368年(明)				1	2		3
永樂通寶	1408年(明)				2			2
無文銭	-		1		1	1		3
不明	-		2		2	1		5
計		2	18	1	39	15	1	76

1点（1.3%）出土している。出土枚数が最も多い銭種は元豊通寶（1078年初鑄）で、皇宋通寶（1038年初鑄）、元祐通寶（1086年初鑄）が続く。平坦部A銭貨の約半数は地鎮遺構からの出土であり、II区本堂地区の出土枚数は突出して多い。なお、明銭はすべてII区の表採・出土である。

銭名のない無文銭が3点出土しており、いずれも銭径が小さく、銭厚も薄く、重さも軽い。また、す穴が空くものや銭文の突起が浅く判読困難なもの、裏面の外縁や内郭の段差がなく平坦なものもみられた。今回明確に判別できなかったが、模鑄銭を定量含んでいる可能性があり、課題である。

（2）鉄釘

平坦部Aでは鉄釘が比較的多く表採・出土しており、その総数は153点である。地区別にみると、II区が75点と半数を占め、I・III区が39点ずつとなる。ただし、中世等妙寺最終段階の新本堂跡SB02、本坊建物跡SB03の規模からいうと出土数は極一部に過ぎない。

鉄釘はすべて、薄く延ばした頭部を叩き、折り曲げられた折釘で、足部の断面は方形を呈している。足部の稜線を明瞭に観察できる程、鑄化を免れたものが散見される点も特筆される。寸法に規格性が看取され、長さ10cm前後の大型品、4～8cm程度の中型品、3cm以下の小型品に大別できる。3cm以下の小型品は床板などを打ち付ける板釘と考えられ、II区で多い。大型品は主に垂木釘、大型品の一部と中型品の中でも長いものは垂木釘もしくは長押釘、中型品のうち太いものは長押釘としての使用を想定できよう。

【付記】

- ①本報告書第2分冊所収の織田2021aでは、出土状況A群を「本坊建物跡礎石より下面の基盤整地層中から出土した一群」としているが、鍛冶工房跡より古く位置づけられる「版築土相当」の認識で設定している。
- ②本節第2項の一部及び第4項については、下記の織田2021bの内容を骨子に加筆・修正し、掲載した。

【参考・引用文献】

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
 大分県教育庁埋蔵文化財センター編 2013 『豊後府内17（第1分冊）－中世大友府内町跡第11・72・76・80次調査－』
 調査報告書第63集
- 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎 2008 『中世都市・博多を掘る』海鳥社
 小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
 小野正敏 2003 「威信財としての貿易陶磁と場－戦国期東国を例に－」『戦国時代の考古学』高志書院
 織田誠司 2018 「等妙寺旧境内の発掘調査成果について－本堂・本坊跡を中心に－」『等妙寺旧境内 国史跡指定10周年記念シンポジウム 中世等妙寺の具体像に迫る』鬼北町教育委員会
 織田誠司 2020 「土器・陶磁器からみた三間町域の中世世界」『清良記と大森城－三間の中世世界を考える－』第4回 清良記シンポジウム資料（シンポジウム延期により未刊行）
 織田誠司 2021a 「I区本坊地区・II区本堂地区出土の土師質土器について」『史跡 等妙寺旧境内－平坦部A(如意顕院跡)発掘調査報告書（第2分冊）－』
 織田誠司 2021b 「等妙寺旧境内出土の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』41 日本貿易陶磁研究会
 鬼北町（旧広見町）教育委員会編 1999 『旧等妙寺跡－平成6年度～9年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
 鬼北町教育委員会編 2005 『等妙寺跡－平成11年～平成16年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書－』

- 鬼北町教育委員会編 2020『奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展』等妙寺開基700年記念 鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展図録
- 鬼北町教育委員会編 2021『史跡 等妙寺旧境内一平坦部A（如意顕院跡）発掘調査報告書（第2分冊）－』
- 金武正紀 2009「今帰仁タイプとビロースクタイプ設定の経緯・定義・分類－」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部
- 櫻木晋一 2016『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社
- 佐々木満 2008「出土品が語る武田氏の本拠—武田氏館跡と新府城跡』『新府城の歴史学』山梨県韮崎市・韮崎市教育委員会
- 重根弘和 2003「中世備前焼に関する考察—形態と変遷と年代について—」『山口大学考古論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会
- 重根弘和 2016「中世備前焼の分類と分布」『中近世陶磁器の考古学』第4巻 雄山閣
- 柴田圭子 2001a「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価—中国・四国地方の遺跡を中心に—」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』中世土器研究会
- 柴田圭子 2001b「伊予の中世備前焼（2）—湯築城跡出土資料の特徴と編年的位置づけ—」『紀要愛媛』第2号（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田圭子 2011a「瀬戸内海島嶼部の様相—芸予諸島の出土資料から—」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
- 柴田圭子 2011b「消費地遺跡から復元する戦国期流通の一様相」『西国における生産と流通＜日本中世の西国社会②＞』清文堂出版
- 柴田圭子 2016「愛媛県南予地域における陶磁の流通」『中近世陶磁器の考古学』第2巻 雄山閣
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也 2015「14・15世紀における沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』35 日本貿易陶磁研究会
- 太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』
- 高山 剛ほか 2019『予土境界地域における中世遺跡群の調査』松野町文化財調査報告書第24集 松野町教育委員会
- 田中 謙 2013「能島城跡の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』33 日本貿易陶磁研究会
- 田中 謙編 2019『史跡 能島城跡—平成15～27年度 整備に伴う調査総括報告書—』今治市教育委員会
- 坪根伸也 2011「南蛮貿易都市 豊後府内における交易と流通—出土遺物からみた豊後府内の特性—」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
- 中井淳史 2011『日本中世土器の研究』中央公論美術出版
- 永井久美男 2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 中野良一・沖野新一・柴田圭子編 1998『湯築城跡』第1分冊（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 永野智子 2017「足利将軍家塔所・相国寺出土の輸入陶磁」『中近世陶磁器の考古学』第5巻
- 日本貿易陶磁研究会 2000『城館出土の貿易陶磁器—織豊前夜の西国大名と貿易—』
- 乗岡実 2005「備前」『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』同シンポジウム実行委員会
- 幡上敬一 2005「第2節 遺物」『等妙寺跡—平成11年～平成16年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 第7集—』鬼北町教育委員会
- 間壁忠彦 1991『考古学ライブラリー 60 備前焼』ニューサイエンス社
- 水澤幸一 2006「遺物からみた中世寺院 土器と陶磁器」『季刊 考古学』第97号 雄山閣
- 水澤幸一 2009「第3章 中世後期の貿易陶磁器」『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』高志書院
- 水澤幸一 2017「中世後期の青磁盤」『中近世陶磁器の考古学』第5巻 雄山閣
- 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 山川公見子 2006「遺物からみた中世寺院 仏具」『季刊 考古学』第97号 雄山閣
- 山本義孝 2006「中世寺院をめぐる信仰 山岳修行」『季刊 考古学』第97号 雄山閣
- 山本義孝 2020「山寺研究から靈場研究へ」『山岳信仰と考古学III』同成社
- 吉岡康暢・門上秀叡 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社